

Title	英国における黄禍論と小説
Author(s)	橋本, 順光
Citation	
Issue Date	2012
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/27394
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

英国における黄禍論と小説

「黄禍論：英語文献復刻シリーズ」の第2回目では、『英国黄禍論小説集成』とも密接な関係にある歴史資料を中心に40点の文献を復刻した。黄禍論が盛んに言及されたのは19世紀末から1940年代にかけてのことである。そこでは世界の覇権と文明は白色人種が担うべきという文明化の使命が前提とされており、経済的ないし軍事的な人種戦争の脅威、あるいは黄色人種による文化や文明の退化という不安などを包括的に意味する用語として、黄禍という言葉が使われたのである。したがって、さまざまな形態とジャンルで予言されてきた人種戦争が、第二次世界大戦という異なった形で実現して以降、黄禍という言葉は、ほとんど見られなくなってゆく。もちろん、そうした痕跡をとどめた言説や人種差別的な言辭が消滅したわけではない。ただ、二度にわたる世界戦争で、人種をめぐる境界と国境は大きく引き直され、あるいは境界自体が無効となり、人種によって世界を区分し、歴史や政治を人種対立によって説明するのは無意味であることが衆目の目に明らかになったとはいえよう。

こうした黄禍がプロパガンダとして、いわば狼たちが押し寄せてくると声高に叫ばれ、狼による蹂躪が扇情的に語られたのは、中国系ないし日本系の移民が問題となったオーストラリアやカナダ、アメリカであって英国ではない。一方、本体解説で詳述したように、そもそも黄禍という概念が広まったのは、日清戦争後の日本による帝国主義政策に対してウィルヘルム二世が画家のクナックフスに描かせた‘Die Gelbe Gefahr’が各国語で翻訳されて以降のことであり、その際にも英国は静観していた。ドイツやフランスのように、帝国主義政策で黄禍が持ち出されることもなく、日英同盟（1902）のせいもあって露骨な日本批判はほとんど禁忌に等しい状態にあった。このように中国系移民の脅威もなく、帝国日本にも宥和的な態度をとっていた英国ではあるが、だからこそ黄禍論が反移民や反日のプロパガンダにとどまらない広がりや深みを示すことになったといえる。政治や経済の切実な問題ではなかったため、現実感のある脅威としてではなく、大英帝国への警世ないし文明批判として利用され、ひいては帝国をめぐる娯楽小説として利用されたのである。

そもそも黄禍論は、これから起こるかもしれないシナリオを予見するという性格上、小説との親和性がきわめて高い。むろんプロパガンダは往々にして小説仕立てで語られるが、英国の場合、より娯楽の要素が強く、娯楽小説として洗練されていたのが大きな違いである。一例を挙げれば、アメリカでは反中国系移民のキャンペーンとしてP. W. Doonerが書いた*Last Days of the Republic*（1880）という有名な近未来小説があり、オーストラリアでは、中国人が攻めてくる架空戦記小説の先駆としてKenneth Mackayの*Yellow Wave*（1895）がある。こうしたプロパガンダ小説を日中同

盟軍による世界戦争という枠組みへ転用し、Yen Howとそれを阻止するJohn Hardyという、ホームズとモリアティの戦いを模した帝国冒険小説として娯楽小説に仕立てたのが、『英国黄禍論小説集成』に収録したM. P. Shielの*Yellow Danger* (1898)である。そして本作で西欧征服の陰謀をめぐるYen Howは、同復刻集に第一作(1913)を収録したFu Manchuシリーズという、黄禍を体現した東洋の怪人の原型となっていた。個のない群衆の襲撃という単なるプロパガンダに堕さなかったからこそ、魅力的な悪のキャラクターが造形できたといえる。そして、日中同盟軍がヨーロッパを席卷するという荒唐無稽な小説が英国で生まれたのは、今回復刻したピアソンとも実は密接な関係がある。オーストラリアやアメリカといった一国の移民問題としてではなく、地球規模の人種闘争という大英帝国の存続に関わる問題として予見し、それゆえ英国で話題になっていたことと無縁ではないからである。実際、*Yellow Danger*は、ピアソンの予言を小説にしたようだと言った書評があるのはその一端といえるだろう¹。逆に本復刻集第1巻収録の*New Far East* (1904)では、小説の*Yellow Danger*に反論する箇所があり、ここでも黄禍論と小説の相関がうかがえる。英国では黄禍論は世迷い言と一笑に付される一方で、それゆえにこそ多くの娯楽小説を刺激することになり、いや笑い事ではないという警告、さらなる反論と、フィクションと評論の双方で百家争鳴を引き起こすことになったのである。

本復刻集第1巻の冒頭には、そうした虚構と論説が入り交じった典型ともいえるパンフレット *Decline and Fall of the British Empire* (1881) を収録した。中国が世界の覇権を握った未来で、大英帝国がなぜ滅んだのかを問答形式で考察したという体裁である。ギボン『ローマ帝国衰亡史』をふまえた題名からも明らかのように、この小冊子の力点は英国の衰退という危機にあり、中国という外部の脅威に置かれているわけではない。しかし、本体の序文で詳述したように、同じ1881年に、まさに同じカテキズムという対話形式で書かれた Olcott の *Buddhist Catechism* はインドや日本での仏教復興運動、ひいてはアジア主義の引き金となり、このパンフレットが前提としているような幻想の東洋像、現実離れしているからこそ、現実のゆがみを写しだす鏡なりあべこべの国としての東洋像、を大きく変化させることになったのである。そうした変化がうかがえるのが、第3巻に収録した「大英帝国衰亡史」と題されたもう一つのパンフレットである。日露戦争に触発されて、同じ警世の趣向は、2005年の東京で刊行された大英帝国衰亡史の教科書という設定になっており、しかもそこかしこに日本の脅威への不安が顔を出しているからである。そして、こうした虚構と評論が入り交じったパンフレットに代表されるように、狼が来るぞと警告を発する書き手が、狼たちが来たあとのことを想像して小説に書くことは珍しいこ

¹ 詳細は Yorimitsu Hashimoto, "Germs, Body-Politics and Yellow Peril: Relocation of Britishness in *The Yellow Danger*," *Australasian Victorian Studies Journal*,(9), 2003 を参照。

とはなかった。第4巻に収録した東洋通の Putnam Weale はその代表であるが、逆に職業作家が時事評論を書くこともしばしば見られた。たとえば第4巻収録の Rider Haggard の講演は、小説 *Ayesha* (1905) の作中で語られる黄禍論と多く共通している。本復刻集を黄禍論小説集成と比較すれば、そうした相関はほかにも多々見いだすことができるだろう。

序文で指摘したように、1894年の北里柴三郎による香港でのペスト菌発見は、日清戦争の勝利とあいまって、科学と兵器という西欧の専有物と考えられていた文明の精華を東洋人が掌握するのではないかという不安を生んだ。表面的な模倣にとどまり自滅するのか、それともそれが逆用されて脅威となるのか、同じ硬貨の両面ともいえる感情は、黄禍論小説集成第1巻の *Yellow Danger* と第5巻 *Radium Terrors* (1912) にそれぞれ描き込まれているといえるだろう。*Yellow Danger* の Yen How 博士は西洋の戦艦を使いこなすのに失敗し、日中同盟軍は一種の細菌兵器によって全滅するのに対し、*Radium Terrors* では日本人科学者の Teroni Tsarka 博士が、ラジウムを使って西欧世界の転覆を謀ろうとする。しかし、ともすれば駆除すべき害虫か何かのように描かれたアジアの人々は、こうした言説の蚊帳の外に置かれていたわけではない。モンテスキューの『ペルシア人からの手紙』(1721) 以来の、直接的には Oliver Goldsmith の *Citizen of the World* (1760) を模して、架空の中国人が書簡を寄せたという設定で、Dickinson はいわゆる義和団事件における西洋文明国家の略奪と征圧行為を非難した。第2巻に収録したその *Letters from John Chinaman* (1901) はガンジーやタゴールにも愛読されるなど世界各地で話題になったが、実際に清朝政府高官の筆と信じられたのが18世紀と異なっていた。特にアメリカでは、駐米公使の伍廷芳が同じような論調の論文を雑誌に寄稿していたので、おそらく彼ではないかと後の米国大統領候補 Bryan は、*Letters to a Chinese Official* (1906) という反論まで出版している。第2巻に収録されている序文が示唆するように、出版前に、彼はそれが誤解だったことに気づくのだが、そんな事態を引き起こすほど、すでに多くの東洋人たちが英語で論陣を張っていたのである。

反論ではなく、油を注いってしまった東洋人や東洋通もいた。Yen How のような第二のジンギスカンが現れて西欧に反旗をひるがえすのではという *Yellow Danger* のような幻想の発端は、末松謙澄が書いた義経＝ジンギスカン論であった。第3巻所収のその *The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan with the Japanese Hero Yoshitsune* (1879) は、内田彌八によって『義経再興記』(1885) と翻訳され日本のアジア主義の象徴としてジンギスカンを再評価するさきがけとなり、英語圏では黄禍の象徴としてみなおすきっかけとなった。日露戦争時に、そんな黄禍論を押さえ込むため英国で講演と執筆に奔走したのは、皮肉なことに末松だったが、日本は文明国であるという宣伝は同時にまた、日本脅威論へと逆用されることにもなる。当初、英国では好意的にとらえられていた日露戦争が、その英領インドへの影響が紹

介されるにつれて、人種戦争としてみなされるようになり、アジア主義の隆盛とその風潮が英国で危険視されていったのは第4巻にあるとおりである。

以上のことを考慮するならば、先駆的な研究である橋川文三の『黄禍物語』（1976）の「はじめに」で何気なく記された逸話が実に興味深いことがわかる。橋川が国会図書館で黄禍論について調べたところ、意に反してほとんど資料がみつからず、見つかったのは前述のShielの*Yellow Danger*という「大伝奇小説」に、「とくに読む気もしないきわもの風」なNohara Komakichiの*Die Gelbe Gefahr*（1935）だけで失望させられたと記しているからである。たしかに橋川がいうように、*Yellow Danger*は翻訳すれば人気がでそうな戦記小説であるが、なぜこうした外国の通俗的な小説が前身の帝国図書館に例外的に所蔵されているかといえ、それは軍などの意向をくんでのことだったからである²。対外イメージ調査やプロパガンダ対策のため、これらの文献は大量に収集されており、橋川がほとんど無視した野原駒吉の書も、そうしたプロパガンダに対する一つの反論ないし宣伝文書にほかならない。さらにいうならば、野原はこのドイツ語の書物のなかで義経＝ジンギスカン論を展開しており、Werner A. Lohéの*Japan, Sonne Asiens*（1939）などでも、なかば肯定的に言及されている。

日露戦争と辛亥革命により、アジア人のためのアジアというスローガンに集約されるアジア主義がかまびすしく議論され、それぞれの思惑のなかで小説と政治、そして英国と東洋と、双方の間で乱反射しながら黄禍論が立ち上がってゆく。アジアのナショナリズムやアジア主義と複雑に絡み合った黄禍論、そして、その議論を巧みに流用しつつ、黄禍論を刺激していった英国のアジア幻想、そんな知られざる系譜を本シリーズは復刻しようとするものである。この小説集と史資料集はその一例にすぎないが、ここから意外な連関や広がりが見いだされ、もうひとつの黄禍の物語があらわになっていくきっかけになれば編者として望外の幸せである。

Volume 1

Pearson's Prediction: Yellow Peril or White Hope?

黄禍論の予言者ピアソンとその余波

本体の序文にあるように、Pearsonは「黄禍」という単語こそ使用しなかったが、その著作は中国系移民の排斥という一国の問題を、人種闘争史観へと総合し、英語圏で多大な影響力を持つことになった。本巻では、中国が世界の支配者となる未来を描いたパンフレットから、そうした未来を現実味のあるシナリオとして描いたPearson、そしてその予言が、日清戦争、義和団事件、日露戦争を経るうちに、どのように反響し、

² 藤元直樹「未来戦小説の時代—それでは、人類はどの戦争を選んだか」『国立国会図書館月報』（604・605, 2011）, pp.2-3.

あるいは反論されたのか、代表的な文献を収録した。反論として典型的だったのが、日本を黄禍ではなく 'White Hope' こと白人の希望として、西洋文明の忠実な代理人としてみならず論説であったが、それらの希望は日露戦争の後、むしろ脅威へ変化することとなった。その転換を決定づけたのが Lafcadio Hearn である。Hearn は、いち早く Pearson を日清戦争と関連づけ、それまで否定的だった日本の文明化を肯定するようになる。その 'Jiu-jutsu' (1895) において、日本は西洋文明を「柔術」よろしく相手の力に屈することでそれを利用し、日清戦争に勝利したと結論づけた。また Pearson を援用して、粗食に耐える黄色人種はコストの点で白色人種より有利であり、文明を担うのは生存競争に勝利する黄色人種となりうることを示唆した。Pearson は Hearn のほかにも日本でよく読まれており、後に「黄人の重荷」や「白閥」など黄禍論に反論してゆく徳富蘇峰にはその流用が特に顕著である。事実、Pearson の著書は、国民社から蘇峰の序文とともに『白哲人種之前途』(1894) と題して抄訳されている。なお翻訳したのは、日露戦争時に、高橋是清とともに外債募集に奔走することになる深井英五であった。

Lang-Tung, pseud.

The Decline and Fall of the British Empire: Being a History of England Between the Years 1840-1981, London : F. V. White, 1881, 32 pp.

匿名の著者について詳細は不明である。千年後の 2881 年、世界を征服した中国が、大英帝国衰退の歴史を学ぶ。ただ執筆者として言及される中国の歴史家 Lang-Tung という名が Lantern を意味しているように、ここでは英国の倒立像が投影されているに過ぎず、中国の覇権というものはなんら脅威として認識されていない。この形式は、日露戦争後の日本への不安を投影することで、第 3 巻所収の Vivian Gray によるパンフレットへと受け継がれることになる。

Charles Henry Pearson (1830-1894)

National Life and Character: A Forecast, Chap. 1 "The Unchangeable Limits of the Higher Races" & 2 "The Stationary Order in Society", London : Macmillan and Co., 1893, pp.29-133, 105 pp.

白色人種は熱帯を植民できず、インドや中国といった有色人種との生存競争に敗れ、その高次な文明は劣等な人種や大衆によって稀釈され、死の海のように崩壊する。オックスフォードの中世史家として出発し、オーストラリアで閣僚として活躍した後、英国に帰国した Pearson はそんな終末論的な予言の書を著した。熱力学第二の法則にならって、いわば文明も熱い社会から冷たい社会へと熱的死を迎えると考えたわけだが、彼の警告は、熱帯医学への関心と期待をむしろ高めることになる。

熱的死を迎えた文明を死の海になぞらえた末尾の一節も、Pearson が嫌悪した通俗文学の最たる Wells の *Time Machine* (1895) にみられる八十万年後の太陽が亡びた世界と酷似している。

Henry Norman (1858-1939)

***The Peoples and Politics of the Far East*, Chap. 24 "The Japan of To-Day", Chap. 25 "Asia for the Asiatics", London : T. Fisher Unwin, 1895, pp. 375-404, 30 pp.**

著者は、後に政治家としても活躍するジャーナリスト。日本滞在記である *Real Japan* (1892) では日本を、とりわけその女性について、三従の教えに言及しつつ賞賛した。本書では日清戦争後のアジア主義の萌芽を危険視し、Pearson を援用して評価を一変させている。いわば愛玩すべき対象としては認知しつつも、帝国へと変化し、肩をならべる存在になりかねないとみるや敵視するというのは、著者に限らず英国でしばしばみられ、その一端は本書で効果的に引用された資料にあるとおりである。ただ、*Japan Weekly Mail* に掲載されたという大隈重信の引用文は、あたかも Pearson を要約したような予言的な内容であり、著者の行き届いた博搜と目配りのよい才覚とがうかがえる。

なお本巻には収録しなかったが、本書は、凌遲の刑に処されて切り刻まれた遺体の写真を掲載していることでも有名である。ご丁寧にも、ページには切り取り線があって、目に触れることを望まない読者には、切り離しておくことができるようになっていいる。凌遲は、英語で百刻みの刑として知られ、非難と同時に嗜虐と好奇の目でしばしば見られた。黄禍論小説集成にある *Yellow Danger* や第 4 巻収録の *Last Persecution* には、そこから連想したとおぼしい、しかし、およそ中国には存在しない残酷な拷問や刑罰が多々登場する。

George N. Curzon (1859-1925)

***Problems of the Far East*, Chap. 13 "The Destines of the Far East", London : Archibald Constable & Co., 1896, pp. 390-412, 23 pp.**

後のインド総督によるアジア旅行記。序文でも言及した Dilke のグランドツアーよろしく、Curzon も後学のために東洋視察旅行を行っている。そして Dilke の *Greater Britain* (1868) を引き継ぐように、英国の優位と覇権を疑わない Curzon にとって、Pearson の懸念は取り越し苦勞でしかない。1894 年が初版だが、日清戦争の考察を収めた 1896 年版を収録した。意見をほとんど変えていないところが、Norman と好対照となっている。本書には別の箇所、名前こそ挙げていないが大陸を横断して凱旋してきた福島安正を英雄視する騒動を冷笑的に言及した箇所がある。

Valentine Chirol (1852-1929)

The Far Eastern Question, Chap 10 "The Japanese Industries at the Kyoto Exhibition", London : Macmillan, 1896, pp.124-137, 29 pp.

Chirol は英タイムズ紙の名物特派員で、外交にも大きな影響を与えた。日本では、鶴見祐輔などとも交流があった。本書は、日清戦争後の極東情勢を分析した同紙連載を書籍化したもの。京都での第四回内国勸業博覧会（1895）の盛況に触れて英国への経済的脅威を指摘している。西欧並みのすぐれた製品が、はるかに安価で生産される脅威は後にダンピングという形で実現することになる。なお Lafcadio Hearn が 'From a Taraveling Diary'（1895）でタイムズ紙から引いた記事というのは、Chirol の記事かと思われる。ただ、正確な引用ではなく、Lancashire への圧迫を征服として誇張して引用しており、ここでも Pearson から援用した生存競争が強調されているのは興味深い。

Henry Norman

The Awakening of the East, Preface, London : William Heinemann, 1900, v-xi, 7 pp.

Pierre Leroy-Beaulieu（1871-1915）の *La Rénovation de l'Asie, Sibérie, Chine, Japon*（1900）の英訳に寄せた前出の Norman の序文。英訳者は Richard Davey。義和団事件に触れて、持論の黄禍論を補強したもの。Norman は、後に *World's Work* というアングロサクソン主義を基盤とする雑誌を創刊し、同誌は英国において日本警戒論を発信する代表的な媒体となってゆくが、その際にもこうした海外思潮の紹介がしばしばみられた。Norman は、主に東欧からの移民制限を目的とする 1905 年の外国人法制定にも関わっていた。

Alfred Stead (1877-1933)

China and her Mysteries, Chap. 11 "The Yellow Peril", London : Hood, Douglas, & Howard, 1901, pp.116-125, 10 pp.

Stead は、日本派のジャーナリスト。義和団事件に際して、黄禍をいうならば中国だろうと、英国公使である林董の序文を掲載して、指摘。日英同盟に際しては、今度は伊藤博文の序文を掲載して *Japan, Our New Ally*（1902）を刊行している。その御用降りは日本でも内田魯庵が『猿の舌』（1921）で風刺したとおりで、プロパガンダ合戦の好例といえるだろう。第 4 巻所収の中国派 Weale と好対照をなす。なお Stead は、*Review of Reviews* を創刊した W. T. Stead の息子だが、父は息子とは正反対に親ロシアだった。

Archibald R. Colquhoun (1848-1914)

***The Mastery of the Pacific*, Chap.14-15 "Japan in Pacific", Chap. 16-17 "Other Powers in the Pacific", London : William Heinemann, 1902, pp.347-408, 62 pp.**

著者はアフリカのローデシアで行政官も勤めたジャーナリスト。中国を中心に極東の専門家としても知られる。本書は人種と文明が衝突する太平洋というヴィジョンをいち早く予見したことで有名。Hearn の 'Jiu-jutsu' と同じく、日本人労働者が粗食に耐えることに驚嘆し、その経済的脅威を訴えた。

George Lynch (1868-1928)

***The Path of Empire*, Chap. 7 "The Japanisation of China", London : Duckworth, 1903, pp.92-106, 15 pp.**

Lynch は、著名な従軍記者。第4巻でみられるように義和団事件には同情的だったが、アジアを再訪した本旅行記では日本と中国の連携を警戒。こうした当時のアジア主義でいう「同文同種」に対する脅威は、日露戦争後に頻出する。ただ著者は、益田孝の *Japan; Its Commercial Development and Prospects* (1908) に序文を寄せるなど、黄禍としてとりたてて警戒しているわけではない。

Arthur Diosy (1856-1923)

***The New Far East*, Frontispiece, Chap. 8 "The Yellow Peril", London : Cassell & Co., 1904, pp. 327-339, 13 pp.**

著者は、ロンドン日本協会の創設にかかわり、同会の副会長もつとめた親日家。初版は 1898 年だが、クナックフスの黄禍の絵を掲載した 1904 年版を収録した。著者もいうように、本文には異同はない。クナックフスや Shiel の *Yellow Danger* にみる軍事的な黄禍論を否定し、真の黄禍は、安価で勤勉な中国人の労働力だと述べる。そして、その挿絵を担当したのは久保田米遷である。容易に想像がつくように、これらの反論は東洋からの経済的脅威として黄禍論へと転用されることになった。

Diosy は熱烈な日英同盟論者であったが、それは彼がロシアとオーストリアに独立を阻まれたハンガリー出身であったことと偶然ではあるまい。日本協会の要職についていたこともあって、ミュージカル *Geisha* (1896) を監修したが、この他愛ない喜歌劇はその後の日本イメージを大きく規定することになった。Pearson を抄訳した前述の深井英五は、その時代錯誤に衝撃を受け、作中の「チン・チン・チャイナマン」という曲は東洋人を嘲笑して囃したてる決まり文句となった。たとえば Diosy とも交流のあった南方熊楠はロンドン日記で、夏目漱石も「自転車日記」(1903) で、それ

それぞれのことを記している³。いずれも親日や好日といった善意が反転する一例といえるだろう。

W. Petrie Watson

***Japan: Aspects & Destinies*, Frontispiece, Chap. 13 "In the Machine Shop", 16 "The Commercial Imagination", 34 "Weltpolitik of the Revolution", 35 "Vis a Vis the Tradition", 36 "The Climax and the Parable", 37 "The Crisis", London : Grant Richards, 1904, Frontispiece, pp.106-113, 133-141, 302-336, 52 pp.**

著者については、もう一冊*Future of Japan* (1907) を刊行しているほか詳細は不明。本書は日露開戦前夜の日本観察記。口絵は、『時事新報』から転載した北沢楽天の「日英同盟、ブリタニアとやまとひめ」(1902)。女神として形象化された日本と英国が、幼児である中国と朝鮮を保全し保護するという、日英同盟の意図を圖像化したもの。煙草の銘柄「ハッピー」でも使用されていたことがわかっている⁴。クナックフスの黄禍の絵とも比較が可能だろう。本書では、これまで繰り返されてきた経済的脅威に加えて、日本の商人が信用できないことが記されている。

Meredith Townsend (1831-1911)

***Asia and Europe*, 3rd ed., Preface, Chap. 1 "The Influence of Europe on Asia", London : A. Constable, 1905, ix-xxiv, pp. 19-42, 40 pp.**

著者はアジア問題の専門家。本書は 1901 年の初版以来、斯界で長く参照された。日露戦争について言及した 1905 年刊行の第 3 版序文。1911 年に第 4 版が刊行されているが、本文に異同はない。初版では東アフリカから、アラビア半島、インド、中国、日本をすべて「アジア」として記述できていたはずが、日英同盟と日露戦争を経過することで、その「アジア」像がほころびてくる過程が如実に序文の変化にあらわれている。日本はナポレオンやジンギスカンといった天才が偶然、登場したことで近代戦争に勝利したのではなく、西洋文明を掌握したことが原因であることを強調し、それゆえ従属を当然と考えてきたアジア諸国に及ぼす影響を懸念している。

Edward Carpenter (1844-1929)

***Towards Industrial Freedom*, 2nd ed., Chap. 9 "Social and Political Life in China", London : George Allen & Unwin, 1918, pp.164-212, 49 pp.**

³ 詳しくは橋本順光『『チン・チン・チャイナマン』の歌と近代日本—夏目漱石から箕作秋吉まで』『国際日本学入門』(成文社, 2009)を参照。

⁴ 水沢勉・永山多貴子編『自然の美・生活の美 : ジョン・ラスキンと近代日本展』(自然の美・生活の美展実行委員会, 1997), p.56

Carpenter は、日本でもよく読まれた詩人兼社会主義の思想家。本書は 1918 年に刊行されているが、収録した論文の初出は 1907 年刊行の *Co-operative Annual* 誌。当時の主な中国論や東洋問題の研究書を手際よく整理しながら、第 2 巻所収の Robert Hart の *These from the Land of Sinim* や Pearson、そして Hearn の ‘Jiujutsu’ を引用し、中国はともかく日本の軍事的脅威は否定できないとしつつも、こうした東洋の覚醒はつまるところ不可避であり、黄禍として恐れるよりも、むしろその結果、西洋に真の覚醒を促すのではないかと、世界の一体化と変革を楽観的に予見する。

Volume 2

The Boxer Rebellion - Letters to and from China

中国と西洋の覚醒 義和団事件をめぐる往復書簡

義和団事件においては、眠れる獅子の覚醒としてその脅威が新聞雑誌などで喧伝されると同時に、西洋列強による帝国主義を批判する反黄禍論ともいうべき論説もまた、多く書かれることになった。その筆頭が、Goldsworthy Lowes Dickinson による *Letters from John Chinaman* である。第 2 巻は、そうした事件に触れて黄禍論をめぐる主な論戦をとりあげた。Dickinson の書簡が実在の中国人によって書かれたと誤解されたことが示すように、義和団事件は、東洋の知識人たちに発言し反論する機会を提供するという副作用を引き起こしていたのである。直接、事件と関係ないとはいえ、新渡戸稲造が *Bushido* (1900) の冒頭で述べた一節は、そうした意識と環境の変化を要約している。新渡戸は、Hearn や Chamberlain といった日本の専門家に挟まれては、およそ自身の拙い英語では十分に意を尽くせないが、彼等がせいぜい弁護人の域を出ないのに対して、自分は被告として発言できる点が有利だと述べたのである。実は、英国に関しては義和団事件そのものは、黄禍論を特に刺激したわけではなかった。むしろ表象における ‘Asia for the Asiatics’ といえる自律性こそが、脅威と考えられたのである。たしかに、もっとも話題になった東洋人による反駁は、東洋人を騙った Dickinson によるものであり、*Bushido* が広く読まれるのは日露戦争まで待たねばならなかったが、Dickinson の反西洋文明のメッセージは、インドをはじめとして、各地で流用されることになったのである。

George Lynch

War of the Civilisations, Chap. 1 "Shanghai, the Liverpool of the East...", 7 "The Church Militant at Peitang...", 10 "Life in Pekin...", 17 "Civilisation Old and New...", 19 "Arms and the Men...", 23 "China Evacuated, not Pacified...", 24 "Western Barbarians and Eastern Civilisation...", 25 "Concluditory", London : Longmans, Green and Co., 1901, pp.1-16, 93-101, 134-149, 216-224, 233-247, 279-302, 89 pp.

第1巻にも登場した Lynch による義和団事件の記録である。黄禍論小説集成第2巻に収録された Henty の *With the Allies to Peking* (1903) でも、参考書として挙がっているように、刊行当時、よく読まれた。初めは、西洋近代の武器を東洋人が使いこなせるのだろうか、あたかも髭をそる主人のまねをしてみそりをふりまわす猿に対するような態度を隠せなかった著者が、非キリスト教徒である日本の方が略奪に加わることなく、またキリスト教徒を熱心に救出するところを目にして徐々に考えを改めてゆく。そうしてキリスト教と文明とは無関係かもしれないことを悟り、ついには自分が中国人であったなら、義和団に加わっていただろうとまで書き記すようになる。ただ結論では、義和団事件に参加した日本にならって、中国もまた文明さえ習得してしまえば、それを生みだし教え込んだ西洋人は排除されてしまうのではないかと、Hearn が予言したような黄禍の恐れを書き記しているのは興味深い。西洋、文明、キリスト教という三位一体を構成していた帝国主義に対する疑念は、本書を参考にしたという Henty の小説とも通底しているからである。文明と野蛮、キリスト教と非キリスト教とに世界を単純に二分し、前者の勝利を当代一の冒険小説に書き記してきた Henty の最後の小説が義和団を題材にしているのは象徴的であり、事実、両義的な位置を占める日本兵の描写は従来の図式が失効しつつあることを示唆している。

Robert Hart (1835-1911)

These from the Land of Sinim, Chap 1 "The Peking Legations", 4 "China and Non-China", 5 "The Boxers: 1900", London : Chapman & Hall, 1901, pp.1-59, pp.116-170, 114 pp.

清朝中国に雇われていた Hart による義和団事件の記録。黄禍といったような軍事的脅威と中国が無縁であるとは、Dickinson も引用するとおりであり、筆致は同情的ではあったが、こうした排外主義運動が潜在しているという指摘は、人種戦争の証としてもよく引用された。また中国が覚醒すれば、西洋の文明を模倣するどころか、それははるかに凌駕し、西洋の独占を追い落とすことになるだろうという、政治家の文祥 (1818-1876) が著者に語った言葉の再録も、黄禍論を刺激することになった。

Anon. [Finley Peter Dunne] (1867-1936)

Mr. Dooley's Philosophy, "The Chinese Situation", "Minister Wu", "The Future of China", New York : R. H. Russell, 1900, pp.77-95, 19 pp.

Dunne は、アイルランド系の口を借りた社会風刺のシリーズを多く執筆した。本書では、駐米公使の伍廷芳も登場する。実際に伍廷芳は、こうした苦言をアメリカの雑誌に寄稿していたので、それをふまえてのことだろう。義和団事件に際しては、

こと論壇に関するかぎり、こうした列強による弾圧や帝国主義的な介入に対して批判する論説が少なからずあった。こうした異国人に擬装して風刺するというのは、18世紀以来の西洋の伝統ではあるが、とりわけ多くの移民があふれるアメリカにおいては、観念的な異国人ではなく、その設定を巧妙に風刺にとりこんだ擬装を発展させることになった。

John Chinaman [Goldsworthy Lowes Dickinson] (1862-1932)

Letters from John Chinaman, London : R. Brimley Johnson, 1901, 62 pp.

Dickinsonは、ケンブリッジのキングスカレッジのフェロー。プラトンの研究や、饗宴を模したような架空の人物達が議論を繰り広げる著作で知られる。それゆえ友人のE. M. Forsterによる伝記によれば、‘League of Nations’という言葉は彼の発案とのことだが、いずれにせよ、国際連盟の思想的な母体を形成したといわれる。本巻に収録したのは、表紙を作家のChestertonが描いた希少な初版である。Dickinsonは、その「グロテスク」な描写を嫌い、後の版では使用しなかった⁵。だからというわけではないだろうが、Chestertonは、Dickinsonの平和主義や異教趣味を後に厳しく批判している。また1913年に、インド、中国、日本と、初めて東洋を訪れ、その旅行記 *Appearances* (1914) のなかで、日本人のBushidoに感心したことを記している。しかし、1930年に本書を携えてDickinsonに面会した吉田健一によれば、日本へ帰国後、満州事変という「十九世紀末に支那に就て書いた本で予告したことが思い掛けない所で実現し始めたこと」にいたく衝撃を受けたことが彼の手紙からうかがえたとも記している⁶。なお、吉田が翌年に帰国したのは、文学は母国の土と言語で行うべきという彼の言葉に従ったことだという。ほかにも、吉田の初期作品「過去」(1944)には、Dickinsonがモデルの人物が登場している。

Wen Ching [Lim Boon Keng, 林文慶] (1869-1957)

The Chinese Crisis from Within, Chap. 18 "The White Peril: From the Imperial and Official Standpoint", 19 "The White Peril: From the Popular Standpoint", London : Grant Richards, 1901, pp.285-329, 45 pp.

著者は、エディンバラ大学の医学部で学び、シンガポールの *Straits Times* 紙で活躍したジャーナリスト。康有為の政治活動を支援しており、本書でも、康の進める清朝改革案が説明されている。そのことは第4巻に登場するJohnstonの *Twilight in the Forbidden City* (1934) でも説明がある。一方、文明国家による略奪を批判したその

⁵ Dennis Proctor (ed.), *Autobiography of G. Lowes Dickinson, and Other Unpublished Writings* (London: Duckworth, 1973), p.165.

⁶ 『吉田健一著作集』22 (1980, 集英社), p.38.

主張は、Hobson の *Imperialism* (1902) でも引用されている。末尾に収められた本巻収録の黄禍論批判の書簡は、‘White Peril’ という言葉を使用した最初期の資料の一つでもある。

William Jennings Bryan (1860-1925)

Letters to a Chinese Official: Being a Western View of Eastern Civilization, London & New York : Harper & Bros, 1906, 105 pp.

著者は、民主党の大統領候補であった米国の政治家。本書は、おそらく駐米公使の伍廷芳による書籍と勘違いして書かれたのであろう反論の手紙。題名に Chinese Official に宛ててとあるのは、Dickinson の書がアメリカで刊行されたとき、John Chinaman という蔑称が避けられたためである。著者は大統領選に敗れたあと、ウィルソン大統領の国務長官を務めるが、1915 年に辞任。国際連盟設立のために運動していた Dickinson とはすれちがいに終わった。1925 年、進化論を学校で教えることの禁止に関する裁判で、創造論の立場から弁護したことで知られる。日本でも牧逸馬が「テネシー州、猿裁判」(1931) で揶揄するように描いているが、聖書の記述をもとに天地創造の年を紀元前 4004 年と算出するような聖書年代学の矛盾を明らかにしたのは、中国の史書の「発見」であった。そのため、18 世紀の理神論者は、中国の歴史に言及することで、そうしたキリスト教の普遍性や独善性を攻撃しており、Goldsmith の *Citizen of the World* においても、同様の風刺がみられる。

George Peel (1869-1956)

The Friends of England, Chap. 10 "The Case of the Yellow Peril", Chap. 11 "The Reply of Christendom", London : John Murray, 1905, pp.206-237, pp.238-254, 49pp.

著者は阿片戦争終結時の首相 Robert の孫で、文筆家、後に政治家。香港で Ah Hok という中国人に出会い、その英国批判を紹介して反論している。そもそも香港は、著者の祖父が首相であったときに締結された南京条約によって英国へ割譲された土地だが、そのことに言及はない。Ah Hok についても詳細は不明ながら、こうした反論とその記録が、すでに奇異な現象ではなかったことを示唆している。

Volume 3

Part 1: The Spectre of Genghis Khan: Japan as Model and Monster

第 1 部: ジングスカンの亡霊とモデルとしての日本

ジンギスカンは、本来、モンゴルの英雄であるが、中国や日本のおよぼす軍事的脅威の象徴としてしばしば引き合いに出された。その一因は、前述したように末松

が英文で執筆したジンギスカン＝義経論であった。英語圏での義経の認知度はもちろん低い、日本もモンゴルも中国も、つまるところ起源は同じであり、モンゴルでなくとも容易に第二のジンギスカンが誕生しようと考えられたのである。なお、この説は、さらに江戸時代にまでさかのぼることが可能で、原型はシーボルトにあることが岩崎克己によって明らかにされている。ただ、源義経を音読みしたゲンギケイがジンギスカンへと変化したのだと最初に述べたのは、岩崎によれば末松だという⁷。また末松の書を、末松の名を伏せて邦訳した内田彌八『義経再興記』によって、日本国内でもジンギスカンをアジア主義の体現者として再発見する機運が起り、それが相乗効果を生んで、物語などにも多大な影響を与えることになる。日本でも神智学協会のBlavatskyが*Isis Unveiled* (1877) で言及しているジンギスカンの墓についての伝承とあいまって、Haggardが*Ayesha*で描いたような小説が、アジア主義の小説として1920年代から30年代にかけて書かれたことは特記しておいてよいだろう。

一方、英国では、ボーア戦争での辛勝から、大国ロシアに善戦する小国日本に学ぼうとする機運が見られた。Hearnが、成功の秘訣とみなした‘Jiujutsu’が効率よい格闘技として高く評価され、強い愛国心と自己犠牲をいとわないBushidoを英国に移入しようという向きさえ現れる⁸。しかし、それは新興国のドイツに学ぼうとする一種の敵性研究と共通しており、Bushidoへの賞賛は、同時に狂信的愛国主義への警戒も秘めていた。たとえば、黄禍論小説集成第7巻収録の*Typhoon* (1913) に登場する、愛国心と自己犠牲をいとわない日本人留学生への警戒心とも通じるだろう。第3巻の第1部では、末松の書とその反響、そして日本への賞賛と警戒が入り交じった文献を収録する。

Kencho Suyematz [末松謙澄 (1855-1920)]

The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan with the Japanese Hero Yoshitsune: An Historical Thesis, London : W.H. and L. Collingridge, 1879, 147 pp.

公使館勤めの末松謙澄が源氏物語を英訳する傍ら、ジンギスカンは義経だったと主張した奇書。小国日本を認知させようとする宣伝は、国内ではアジア主義を刺激し、英語圏では黄禍論を引き起こすことになる。日露戦争時、末松は、*Risen Sun* (1905) などの文筆活動で、ジンギスカンと日本は無関係であることを強調し、そうしたアジア主義や拡大主義に対する懸念を何度も打ち消している。

⁷ 詳細は岩崎克己編の『義経入夷渡満説書誌』(岩崎克己, 1943)を参照。なお本章は私家版であるが、もっとも関連文献を博搜して整理しており、いまだこれを超えた研究はみられない。

⁸ Yorimitsu Hashimoto, ‘White Hope or Yellow Peril?: Bushido, Britain and the Raj’ in David Wolff, et al. (eds.), *The Russo-Japanese War in Global Perspective*, v.2 (Leiden, Brill, 2007), 379-402.

C. Pfoundes

Lucifer, A Theosophical Magazine, Vol. 2 (June 15th, 1888), "The Romantic Story of Genghis Khan", London : Theosophical Publishing, 1888, pp.277-280, 4 pp.

Pfoundes は、英国の仏教研究者。末松の書籍については一言もないが、好意的に要約し紹介している。著者は同様の記事を、1882年に王立歴史協会にも報告。神智学協会は、降霊術などオカルティズムで有名だが、東洋の叡智を復活させようとする試みは、インドやアジアのナショナリズムを刺激することにもなった。

Arthur Morrison (1863-1945)

Strand Magazine, May 1912, "The Japanese Bayard-Minamoto Yoshitsune", 1912, pp. 531-538, 8 pp.

著者は、推理小説家、浮世絵研究家としても有名。ここでも末松には言及がないが、ゲンギケイからジングスカンへと説明していることから、Pfoundes 経由かどうかは不明ながら末松の反響であることは明らか。翌年には、第1巻で紹介した Arthur Diosy も、日本協会での ‘Yoshitsune the Boy Hero of Japan’ で、同説を紹介している。

Alfred Stead

Great Japan: a Study of National Efficiency, Forward, Chap. II "Patriotism", III "Bushido, the Japanese Ethical Code", London : John Lane, 1906, foreword, i-vii & pp.19-58, 54 pp.

末松の広報外交を援護した Stead (第1巻参照)。文明化が進みすぎ、退化の恐れがある英国は、日本の愛国心、および武士道に学ぶべきとモデルとしての日本を提示。序文は元首相のローズベリー伯。同じ傾向は、Baden-Powell のボーイスカウト運動にもみられ、その *Scouting for Boys* (1908) において彼は、柔術を勧め日本の武士道を賞賛する一方で、さもないとドイツと日本に征服されるかもしれないと警告も発している。

Vivian Gray [Elliot E. Mills]

The Decline and Fall of the British Empire, Alden & Co.: Oxford, 1906, 54 pp.

著者については不詳。筆名は、Disraeli の同名の小説 (1826) にちなむ。2005年の未来に日本人歴史家によって書かれた大英帝国衰亡史の教科書という設定のパンフレット。初版は1905年。徴兵制の必要を訴える内容は、若者が退化すると憂慮していた Baden-Powell はじめ多くの人々に賞賛された。本書は増補改訂した第2版。オーストラリアが日本領となっているなど、モデルとしての日本は同時に潜在的脅威とみなされた一例。日本でも『英国衰亡論』(1906)としていち早く翻訳された。

Part 2: The Russo-Japanese War as Racial Conflict

第2部:人種戦争としての日露戦争

英国では、当初、日露戦争は人種戦争とはみなされず、むしろ日本の愛国心に学ぼうと、黄禍論とは正反対のことがおきていた。それは表だった日本批判が事実上、禁じられていたということでもある。たとえばChestertonは、おそらく日露戦争の直前か直後のころの回想で、George Wyndham、General Seeley、Charles Masterman、Winston Churchillと日本についての話になったとき、みな日本が嫌いにもかかわらず、新聞では日本への批判が禁じられ、日本については賞賛するのが慣例であるのはなぜなのかとChurchillに聞いたと記している。すると彼は微笑するだけで答えようとはしなかったという⁹。

ただし、日露戦争が終わり、インドの独立運動をはじめとするアジア各国への刺激が取りざたされるようになり、日本におけるアジア主義が隆盛するにつれて、日露戦争は人種戦争として語り直されることになる。第3巻の2部では、英国で例外的に日露戦争を人種戦争とみて日本を警戒していた二人の記者の文献からその抜粋を収録する。

Francis McCullagh (1874-1956)

***With the Cossacks*, "Part II: Chap. 1 "I Join Mishchenko", 8 "The Battle of Mukden", 13 "The Retreat from Mukden", 16 "Back to Liaoyang", 17 "From Liaoyang to dalny", 18 "From Dalny to Japan as a Prisoner of War", London: Eveleigh Nash, 1906, pp. 95-115, 221-227, 280-312, 341-392, 113 pp.**

著者は、日本への滞在も長く、日本紹介の記事も執筆している新聞記者。しかし、*New York Herald* 紙の記者としてロシア軍に従軍し、捕虜として見世物のように護送された記者は、これは人種戦争だと実感する。日本軍の雄叫びに、これまで西欧に屈してきたさまざまなアジアの民衆のときの声が重ね合わせられる箇所が好例。1915年刊行の森鷗外序文で土岐松也訳の『コサック奮闘録』は、『外国武官の観戦秘聞』(1929)に収録されるが、同じ一節が伊藤整の『得能五郎の生活と意見』(1941)でも、西洋人の本音が聞けたようだとの効果的に引用紹介されている。

F.A. McKenzie (1869-1931)

***The Unveiled East*, Chap. 1 "The Purpose of New Japan", 2 "The Fight for the Pacific", 9 "Japan's Commercial Campaign", 13 "The Problem of the Emigrant", 22 "Japan and Christianity", 23 "England's Opportunity", London : Hutchinson & Co.,1907, pp.**

⁹ G.K. Chesterton, *Autobiography* (London: Hutchinson,1936), p.123

1-30, 119-130, 163-178, 305-322, 75 pp.

著者は、英国 *Daily Mail* 紙記者として日露戦争に従軍。以降、朝鮮半島について多くをレポートした。その一つ邦訳『朝鮮の悲劇』は有名。太平洋での衝突、日本の経済的脅威、そして拡大主義や移民の増加について、ハーンを引用して警戒する。

Volume 4

The Breakup of China and Asia for the Asiatics

アジア主義への警戒と辛亥革命

第 4 巻では、これまでの黄禍論の要素が相互に越境しながら、小説や論説に頻出してゆく例をとりあげる。清朝中国が革命騒ぎで動揺するにつれて、小説の *Yellow Danger* が予言したように、中国の崩壊と分割が、西欧列強の対立を激化させるのかといった問いがまじめに論じられるようになってゆく。一方、Pearson が憂慮した人種間の生存競争は、Weale によって換骨奪胎され、より現実的な人種地図へと書き換えられることになる。日露戦争のアジア各国への影響あるいは流用は無視できなくなり、義和団事件が突きつけたキリスト教と文明がお互いに自律した存在であるかもしれないという実感は、徐々に自明なこととして受け入れられはじめてゆく。武士道への熱い期待とその流行は、こうしたキリスト教倫理の失効と連動しているが、当然ながら、その創られた伝統に対する反感も広まることになる。広大な中国国内での動乱が、ロンドンの阿片窟に重ねられ、世情の不安とともに、虚構と論説の境界はいつそう曖昧になってゆく。一見、さもありそうな陰謀と物語が阿片窟の煙のなかで混じりあうなか、怪人 Fu Manchu が誕生し、多くの人々の心をとらえたのは、辛亥革命の混乱がまだ続く、第一次世界大戦前夜のことであった。

H. Rider Haggard (1856-1925)

The Days of My Life, Vol. II, Appendix, London : Longman, green & Co., 1926, pp. 261-272, 12 pp.

Haggard は *King Solomon's Mines* (1885) で有名な冒険小説家。その 1905 年のカナダでの講演再録。講演では、日本により中国が覚醒する脅威を指摘するが、同時期に連載していた小説 *Ayesha* (1905) では、中国から西欧世界を席卷しようとする女王が登場する。

Francis Younghusband (1863-1942)

The Empire and the Century, "Our True Relationship with India", London : John Murray, 1906, pp. 599-620, 22 pp.

著者は、1904年にチベットに遠征した有名な探検家。ロシアに対する日本の勝利がインドに及ぼす悪影響を懸念。こうした指摘自体は珍しくないが、帝国を言祝ぐ書物で、Younghusbandという英雄によって指摘されていることは特記すべきだろう。

L. E. Neame

The Asiatic Danger in the Colonies, Chap. 1"An Empire Problem", 2"The Value of the Asiatic", 4"Asiatic Competition", 6"The Case of Australia", 7"Some of the Dangers", 8"What is the Remedy ", London : George Routledge & Sons, 1907, pp. 1-19, 24-52, 70-107, 86 pp.

世紀転換期に、鉱山労働者として中国系やインド系の移民が導入された南アフリカ。現地のジャーナリストによる反移民の書。本書冒頭では、有色人種が増加し、白色人種が追いやられるだろうという、よく引用された Pearson の一節がエピソードとして掲載されている。一方、現地でガンジーが挑んだのはこうした偏見である。

Seven Bishops [W. Awdry (1842-1910), J. C. Hoare]

Mankind and the Church, Pt.3 Chap. 5 "Contribution of the Japanese", Pt.4 Chap. 1 "Characteristics of Chinese", London : Longman, Green & Co., 1907, pp.227-236, 239-251,23 pp.

前者は日本在住の、後者は中国在住の聖職者。アジアとキリスト教の衝突と融和を論じる。義和団事件の後、キリスト教とアジアとの関連をアジアに住む聖職者の側から論じた数少ない資料。Awdryは、ほかにも1905年10月2日付けの *Times* 紙に、日本への過大評価は、戦後の日英関係を損なうと指摘。

Douglas Story

To-morrow in the East, Preface, Chap.23 "The Spirit of Nationalization", London : Chapman & Hall, 1907, pp.243-255, 13pp.

著者については新聞記者ということ以外は不詳。日露戦争に従軍した記者が再度アジアを探訪する。第1巻収録の Townsend による指摘そのままに、スエズ以東の東洋人が自立し経済的脅威を及ぼしていることを警告。これまでこうした憂慮は、‘Asia for the Asiatics’ と書かれることが多かったが、‘Nationalization’ こと臣民から国民へと変化していると指摘するのは興味深い。

R. F. Johnston (1874-1938)

From Peking to Mandalay, Chap. 17 "Bhamo to Mandalay", 18 "Conclusion", Note 46-48, London : John Murray, 1908, pp.322-390, 441-446, 75 pp.

著者は、後に宣統帝の家庭教師となる東洋学者。本書は中国から英領ビルマへの旅行記。清朝崩壊を見込んだ英領周辺調査したとも考えられよう。中国愛好者であった Johnston でさえも Hearn の 'Jiujutsu' に基づいて、経済的脅威を示唆している。

Valentine Chirol

***Indian Unrest*, Chap. 3 "A Hindu Revival", 11 " Revolutionary Organizations Outside India", Macmillan and Co: London, 1910, pp.24-36, 145-153, 27 pp.**

Chirol (第1巻) のインド論。日露戦争や神智学協会 (第3巻) によりインドのナショナリズムが過度に刺激されていることに懸念を示す。一方で、こうした情報は日本のアジア主義やインド独立支援をさらに刺激することにもなる。

B. L. Putnam Weale (1877-1930)

***Conflict of Colour*, Chap. 2 "The Yellow World of Eastern Asia", London : Macmillan, 1910, pp.122-183, 62 pp.**

中国派の Weale は、日本派 Stead の *Great Japan* (第3巻) に反論。Pearson を援用して黄禍といえば日本のアジア主義と警告している。初出は、Henry Norman (第1巻) が創刊した *World's Work* 誌。

A. M. Thompson (1861-1948)

***Japan for a Week*, Chap. 20 "Barbarism and Civilisation", 21 "China's Awakening", London : John Lane, the Bodley Head, 1911, pp.167-198, 32 pp.**

著者は、ジャーナリスト兼劇作家。Lynch (第1巻) を引いて、中国の覚醒こそ経済的な脅威をもたらすのではと分析。帰国後、著者はミュージカル *Mousme* (1912) の台本を執筆。大仕掛けで地震の場面上演するなど工夫するも、演目自体は失敗作に終わる。

George R. Sims (1847-1922)

***Off the Track in London*, Chap. 11 "In Limehouse and the Isle of Dogs", Jarrold & Sons: London, 1911, pp.180-196, 17 pp.**

著者は、多作で知られるジャーナリスト兼作家。19世紀以来、阿片窟潜入記事はロンドンの雑誌に定期的に見られたが、1910年を過ぎると、ロンドンの阿片窟に革命騒ぎで混乱する中国が二重写しにされてゆく。そんな風潮を代表する一編。黄禍論小説集成の解説で記したように、こうした阿片窟幻想を Sweeney Todd 伝説と巧妙に結びつけたのが、*Mystery of Dr. Fu-Manchu* (1913)。

B. H. Chamberlain (1850-1935)

***The Invention of a New Religion*, London : Watts & Co., 1912, 30 pp.**

Stead や末松が宣伝する武士道という伝統が、いわば第二の自然として認知されている現状を批判。ただし、新渡戸以前に「武士道」という言葉がまったくなかったわけではない。*Things Japanese* の 1927 年版にも再録されたが、本論はその稀少な初出原本。

G. K. Chesterton (1874-1936)

***What's Wrong with the World*, "The Empire of the Insect", London : Cassell & Co., 1913, pp.257-265, 9 pp.**

英国の武士道熱を批判し、盲目的な愛国心は蜂や蟻を思わせると風刺。このように東洋人の群衆を昆虫になぞらえるのは、黄禍論小説とも通底する。なお熊や人をおびやかすまでに蜂の巣が巨大化したというのは、日露戦争が熊と蜂の戦いとして戯画化されたことからの連想だろうか。ただし、そこから悪魔こと蠅の王を導きだすのは Chesterton 一流の技巧といえる。

E. Bruce Mitford (1837-1916)

***Japan's Inheritance*, Chap. 18 "Japan as a Colonial Power", 19 "Where East meets West", 22 "A Peep into the Future", New York : Dodd, Mead & Co., 1914, pp.329-380, 52 pp.**

著者は *Garter Mission to Japan* (1906) や *Memories* (1915) など親目的で知られる外交官。しかし、反ユダヤ主義で悪名高い Houston Stewart Chamberlain (B. H. Chamberlain の実弟) の英訳 *Foundations of the Nineteenth Century* (1910) に序文を書く一面も忘れてはならないだろう。ここでも小説 *Yellow Danger* そのままに日中連合による人種戦争を予言。実は Mitford は、同様のことを義和団事件に際しても記している。*Times* 紙 1900 年 7 月 12 日に投書し、北京での日本政府の行動は賞賛に値するものの、わずか数十年前には義和団と同じように排外主義で凝り固まっていた日本軍を信用するのはまだ早急にすぎると強調。一度でも日本に中国での足がかりをあたえるならば、中国人を最強の戦士へと改造し、カイザーが予言した黄禍が現実のものになると警告した。